

3月11日の午後2時46分に、ぼくは、  
下校の時間で学校の昇降口前に並んでいまし  
た。すると、とつぜんゆれ始め、昇降口の窓  
ガラスが割れて、校舎もくずれ、校庭が地割  
れしました。そして、その校庭に、みんなで  
ひなんしました。校舎から、次々に人が出て  
きています。校庭に並ぶと、親がむかえに来  
た人から帰っていくようになっていました。  
ぼくの学校の人、全員無事でしたが、校舎  
は、こわれてしまって、今は、仮設校舎で生  
活しています。この震災があって、身の回り  
のことが、とても変わったと思います。そし  
て、震災でたくさんの方が亡くなるのは、悲  
しいんですけど、人の命について考えること  
ができました。



## 203 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 下重 杏奈

私が、東日本大震災を体験したのは3年生のころです。今は6年生です。震災から3年がたちました。まだ私は3年生でした。下校する時に東日本大震災が起きました。地面にひびが入り、校舎もゆれて、校庭もくずれていく様子を目のあたりにしました。とてもとても、怖かったです。この世が終わっていくのかと思いました。周りは、さけび声と、泣き声でいっぱいでした。私も怖くて友達と泣いていました。涙がとまらなかったです。この東日本大震災でたくさんの方の命がなくなりました。私が今こうして元気に暮らしてられるのは人々が協力し合い、助け合って復興に力を入れてきたからだと思います。私は3月11日の東日本大震災で、命の大切さや協力し合うことの大切さを学びました。今もみつかっている人がいると思います。早くみつけてあげてほしいと思いました。東日本大震災はもう二度とあってほしくないし、同じ体験を絶対してほしくないと思いました。

204

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 高木香楓

震災の体験談と復興への想い																			
私は、震災が起きた時、学校を早退して、																			
知り合いのお通夜に行っていました。奇跡的																			
に親戚や家族が集まっていたので、電話がフ																			
タがらなくても心配はありませんでした。で																			
も私たちは建物の二階にいたので階段を降り																			
なければならなかったのです。降りようとし																			
た時、頭に花びらが当たりそうになりました。																			
がゆか、たけど、良い経験でした。																			
完全なる復興をと人々が願っています。震																			
災前も不自由なく生活するという事は難しか																			
ったと思います。地球には、不自由が必要																			
です。でも、不自由すぎると、人間はストレ																			
スをかかれます。一人一人が復興に協力でき																			
る事があると思います。例えば、こまの募																			
金やレシートで募金で日本の国、にいる人を																			
助けるという活動も各地で行われています。																			
これから、福島を、全国を、世界を、変え																			
ていく復興を願っています。																			

(20文字 × 20行)

205

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 鈴木 学可

私は、3月11日の東日本大震災のとき2年  
 生でした。そのときインフルエンザで病院に  
 いました。そして、14時46分緊急地震速報が  
 鳴りました。私は、聞いたときのな音だっ  
 たのでとってもしびっりしました。生まれつ  
 きじゅうの大きな地震だったので泣いてしま  
 いました。そして、家に帰るまでにものすく  
 しい時間がかかりました。いろいろな建物か  
 ずれていたりしていたのとって怖か、た  
 です。その日は、いつ地震かくるか分からな  
 かったのでおむれませんでした。私は、食よ  
 くがなくほとんどご飯を食ひませんでした。  
 だんだん地震がおさまってきた、やっ少し  
 ほ、としました。福島県は、原発や津波もあ  
 った大変でした。今も原発は怖いけど、6年  
 生になって地震に慣れていろいろな学習をして  
 昔、あった災害などについてよく知る  
 ことができてよかったです。いつ大きな災害  
 が行るか分からないけどそのときは冷静に事  
 全に行動をとりたいです。

(20文字 × 20行)

## 206 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 留場 舞

三月十一日、私がそれに被災したのは、小  
 学校四年生の、帰宅後の出来事でした。そし  
 て、私はこの体験を通して、こう思いまじた。  
 「全然、意識が足りなかつた。」  
 私の家は特に大きな被害を受けませんでした  
 だが、もしものことを考えると、今でもとて  
 も恐ろしく思います。また、災害対策につい  
 て、大いに重要だと理解できました。1つの「経  
 験」として、忘れないでいきたいです。  
 また、その意識が、自分の命を左右するの  
 で、様々な災害にも、適切な対応を取れるよ  
 うになりたいです。  
 私は、復興したら、とにかくそれを嬉しく  
 思います。それは、震災で命を亡くした遺族  
 の方々に、元気をもたうすことにあり、また  
 新たにスタートを切れるからです。だから、  
 き、と、災害に強い町に生まれ変わら、そし  
 て、災害に対応できる人が増え、そして、  
 二度とあのような悲劇や過ちを、くり返すこ  
 とが絶対に無くなることを私は望んでいます。

(20文字 × 20行)

207

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 緑川祥大朗

全く現実味がなかった。最初は本気で、夢  
 中ドゥイリを疑、たりもした。けれども、そう  
 ではなかった。TVで毎日流される、原発の  
 報道。水やガスが使えなかった日々。現実と  
 かけ離れた現実には、戸惑いながら生活してい  
 た。あんなから四年が過ぎようとしている。僕  
 達は、今はほとんど「地震」の影響はなか  
 ったように暮らしている。けれども、今だに消え  
 ない被害がある。「原発」だ。福島県の復興  
 は、この原発による問題を解決しなければ、  
 終わ、たことはない。原発からは離れたい  
 わき市に住んでいる僕達は、あまり影響を受  
 けていない。しかし、原発付近に住んでいた  
 ため、故郷に帰れなくな、た人々、その心に絶  
 望した人々の死とその家族の負、た心の傷。  
 これは、決して忘れてはならない。思いがあ  
 り、怒りであり、悲しきだ。「心の傷復、こ  
 れが、復興を目指すこの福島県の、最大の課  
 題である」と、僕は思う。

(20文字 × 20行)

## 208 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 堀江智生

僕は、3月11日に初めての大规模な地震に  
 立ち会いました。この日は、ちょうど小学校  
 の帰りでしたか、周りの建物が大きくゆれ、  
 不安な気持ちや恐怖が、ぱいでした。家に  
 帰、た後も地震は続き、僕の家族は実家の福  
 井に避難しました。高速道路は使えず下道で  
 行きました。でも、地震は続いていきます。地  
 震の影響で自然災害、行方不明者・死亡者の  
 増加、さまざまな被害が僕達を襲いました。  
 特に海沿いの地域は津波という恐ろしい波が  
 その地域をのっとりました。そして、津波や  
 地震の影響で第一次原発などの被害もどまし  
 た。現在も原発事故は続いていきます。今たに  
 仮設住宅に住み続ける人たちもいます。僕は  
 その人々を見れないくらい悲しいと思、こい  
 ます。なので、僕の心は今も痛んでいます。  
 これからは、やはり協力し合うことが重要  
 だと思います。助け合えなければできないこ  
 とだ、とあるし、復興の助けにもなるからど  
 す。し、かり支えられる人になつたのです。

(20文字 × 20行)

3月11日、その日は、突然や、てきた。  
自分は部活動で小学校の校舎内にいた。窓  
をながめていた。と、その時、大きなゆれが  
おそ、てきた。震度5強はあるだろうか、顧  
問にひかれて外へ出たのを見えている。  
そこから2日ほどはその小学校の体育館で  
すごした。カンパンをかじった生活は、とて  
も今の生活と同じとはいえない。当時は、そ  
れほどまでに大変だ、たのだ。  
それから母の実家である程度の期間をすご  
すことにな、たのだが、3・11に追い打ち  
をかけるように、福島原子力発電所が爆発  
した。  
あれからもう4年の月日がたとうとしてい  
る。いまたにテレビでもこれらの話は終わら  
ない。また、仮設住宅から出れない人だ、て  
いる。復興は最前線でや、てもらいたいもの  
である。自分の口からいえることはただ1つ。  
震災前の美しい福島を返してくれ。それだけ  
である。

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分。この日から私  
 達の生活は変わりました。なにもかもを  
 失い、私達がいままで経験したことのない日  
 が始まりました。まさに地獄の中にいるよう感  
 じました。  
 震災当時小学 4 年生でした私は正直とんな  
 車がおきているのかわからなかった。兄が迎  
 に来た家に帰ったが、水槽の水はこぼれ、本  
 は落ちていて、ガラスも割れていました。この日  
 から生活を変えてくわしいライオンが  
 判断された。食料も水も配給制になった。本  
 当に地獄の中にいるような感じでした。  
 た。まじく辛い生活をしていました。いなくても  
 必要な出来る用意をしていました。しばらくこ  
 の生活を続けていくと、ライオンが少し  
 ずつ復旧してきてきた。  
 今もまだ、原発や風評被害、がれきの撤去  
 作業など、やることはまだまだある。ただら  
 こそ皆で協力して復興をしていきたいと私は  
 思っている。

211 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 <sup>土</sup> <sup>花</sup> 奈子 <sub>退</sub> 藤

2	0	1	1	年	3	月	1	1	日	私	達	は	今	ま	ど	に			
体	験	し	た	こ	の	な	い	大	地	震	を	経	験	し	ま	し	た		
あ	の	当	時	の	こ	と	は	今	ど	も	た	れ	て	い	ま	せ	ん		
死	ぬ	ま	ど	一	生	た	れ	な	い	出	来	事	だ	と	思	い	ま	す	
私	は	大	地	震	が	起	き	る	直	前	友	達	と	学	校	の			
校	門	を	出	る	前	で	い	っ	し	よ	に	遊	ぶ	約	束	を	し	た	
こ	と	を	覚	え	て	い	ま	す	そ	し	て	友	達	が					
「	ね	え	何	か	ゆ	れ	て	な	い	？	」								
と	言	っ	て	私	は	そ	の	場	で	止	ま	っ	て	確	認	し	た	ら	
本	当	に	ゆ	れ	て	い	ま	し	た	そ	れ	か	ら	ゆ	れ	が			
◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	
ど	ん	ど	ん	大	き	く	な	っ	て	い	ま	し	校	門	が	ガ	タ	コ	ガ
タ	コ	と	激	し	く	動	か	い	て	立	っ	て	い	る	こ	と	が	ぞ	き
な	く	て	ま	わ	り	込	み	ま	し	た	も	う	死	ん	じ	か			
う	ん	じ	か	な	い	か	と	思	い	す	ご	こ	く	怖	か	っ	た	ぞ	す
他	の	県	の	方	々	が	い	ろ	い	ろ	支	援	し	て	く	れ	た	り	
し	て	心	が	あ	た	た	ま	り	ま	し	た	私	達	も	い	っ			
か	恩	返	し	て	ま	た	ら	な	と	思	い	ま	す	だ	か	ら	募		
金	な	ど	協	力	が	き	る	こ	と	は	き	る	だ	け	積	極			
的	に	取	り	組	み	た	い	ぞ	す										

212 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 永塚千穂

私は、地震が起きたとき、小学校の四階に  
 いました。地震が起きた瞬間は向があつたの  
 が分からず、先生の指示にしたがい、階段を  
 降りていました。その途中で自力で降りられず  
 しゃがみこんでいる生徒をかついで降りてい  
 る先生がいました。そのとき私は「今はふつ  
 うじゃないんだ」と思いこめくなりました。  
 林舎へにけた後、自宅へ帰るのに歩きではな  
 く車だと指示されましたがその日は姉の卒業  
 式で親がいないので私はどうしようと思  
 いました。そのとき友達のお母さんが偶然家へ  
 来ていて、「乗せていきな。」と言われたの  
 で私は家に帰ることができました。でも安心  
 はできませんでした。家の中がぐちゃぐちゃ  
 になつていたので。回は食器棚からおち  
 ちと割れていて、私の部屋も立ち入り出来ない位物  
 であふれていました。  
 二世代の力を結ぶ私達はこの震災を忘れる  
 来未へとうけついでいくことが大切だと思  
 います。

(20文字 × 20行)

## 213 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 大竹 千穂

震	災	当	時	、	み	ん	が	驚	き	し	な	か	、	た	と	思	う。		
帰	る	用	意	を	し	て	い	る	時	に	お	こ	、	た	急	な	ゆ	か、	
家	に	っ	い	て	知	っ	た	「	千	年	に	一	度	の	大	地	震	、	と
い	う	言	葉	な	ど	、	自	分	自	身	驚	い	て	い	た。				
幸	い	、	私	の	住	む	地	区	で	は	電	気	の	停	止	ほ	な	く、	
水	の	復	帰	も	早	か	、	た	、	そ	の	た	め	数	回	の	水	く	み
程	度	で	大	き	な	問	題	は	な	か	っ	た。	し	か	し	、	ほ	か	
の	地	区	で	は	そ	う	も	い	な	か	、	た	よ	う	な。				
現	在	の	様	子	を	見	る	と	津	波	の	被	害	が	あ	、	た	地	
区	は	た	い	た	い	の	復	興	が	終	、	こ	い	う	よ	う	な。	た	
水	原	発	の	被	害	が	あ	、	た	地	区	は	そ	う	も	い	、	こ	
な	い	な	ら	う	。	そ	れ	な	の	に	一	部	の	人	は	原	子	力	発
電	を	つ	づ	け	よ	う	と	し	て	い	る。	約	2	年	、	原	発	無	
し	て	生	活	を	し	た	か	、	特	に	何	の	問	題	も	な	か	、	た
と	思	う。																	
こ	の	こ	と	か	ら	、	日	本	は	原	発	が	無	く	と	も	書	、	
と	い	け	る	の	ど	は	な	い	な	ら	う	か。	今	は	無	理	か	し	
れ	な	い	か	、	少	し	ず	づ	減	ら	し	な	く	ず	こ	と	が	今	後
行	う	べ	き	活	動	な	と	私	は	思	う。								

東日本大震災は2011年3月11日の午  
 後3時ごろにおこりました。私は、そのころ  
 小学四年生でちょうど下校時間でした。  
 皆は、学校に残り、7いたり、外でゆくり  
 帰って7いたりしていたと話していたか私は家  
 に帰ってきたとたんに地震がおきました。最  
 初は小さい揺れか何回も何回もありましたが、  
 だんだん大きなゆれへと変わり、重たいものを  
 次々と運ぶように、7しを押しえたりしま  
 した。地震がだんだん弱まるところと二階に  
 あり、た本棚の本は散らしてあり、外のコンクリ  
 ートで出来た壁も粉々に崩れていました。  
 もし、帰って7いのかおどか、た、家におこ  
 った祖母はどうか、7いたのたさうと考  
 えてふりえかたまりませんとした。その後  
 水が止まり、たりなどしておふりや食料水など  
 に大変困り、たりもしましたが、一番心配な  
 のは、津波にあたり、た四倉などです。私のいと  
 こも津波にあたり、7侵水したと話を聞き、私は  
 二の出来事を忘れお伝えしてまたいす。

## 215 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 小田 珠生

私は、3月11日に起きた、東日本大震災で  
 深く友への思いというものを知った。  
 私は、地震のくさ少し前まで、学校から家  
 へ戻る、下校中だった。友と別れを分け、自  
 宅に帰、たその瞬間、大きな地震がきた。と  
 の時、私は「今ごろ学校から家が遠い人はど  
 うしているだろうか」、「安全な所へみんな  
 ぞまただだろうか」といっていることが気にな  
 ったが、自分の家の中の物がたおれたり、こわ  
 れたり、いろいろな初めての体験をした。  
 思い通りに物業式も物まらず、みんなと連  
 絡がとれない日が長く続いた。  
 これらと、さみしくて、つらい体験はもう  
 したくない。自然災害によって、人々の命が  
 失われたいよう、私たちが日々の生活から、  
 自然災害に備え、いろいろな準備をしなけれ  
 ばならないと、改めて思った。また、この体  
 験は、記憶から消すことはできないが、心に  
 負った傷は、人の心でみんな協力し、変え  
 ていかなければならないと思った。

(20文字 × 20行)

216

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 木戸 玲奈

何気ない日常にそれは起こった。地面は大  
 さく揺れ、道路は隆起してマンホールは、はが  
 れ水があふれでいていた。

私は、大地震が起きた時小学校にいた。下  
 校する途中で大きく揺れ始めたので校庭に避  
 難した。その日は、揺れも収まり家に帰った。  
 しかし、他の地域では津波がきたり土砂災害  
 が起こっており、数日後には原発が爆発する  
 なで二次災害が起きていた。原発が爆発した  
 ことにより、放射線が出てきて私の家族は全  
 員で関東に住んでいる親戚の所に避難した。  
 私は避難先で食べ物などの大切さを学ん  
 だ。また、早く住んでいた所に戻りたいと思  
 うことがあった。

私は、復興を早く進めてほしいと思う。今  
 避難している人の中にも地元に戻りたいと思  
 っている人はいると思うので災害が起きた所  
 のかみさの処理なども進めてほしいと思  
 っている。

(20文字 × 20行)

## 217 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 鈴木栄利佳

津波、原子力発電所の事故。どれも実感が  
 わかずにテレビの向こうの世界の出来事のように  
 思えた。しかし、原発の影響で避難をし転  
 校してしまった友人もたくさんいた。幼い頃  
 がう某に遊んだ友人と離れちゃうのは可  
 く寂しかった。でも、本当に寂しが、たのは  
 長く住んだ土地から離れなければならな  
 かった人々だと思う。私の住むいわき市には、避  
 難を余儀なくされた人々がたくさん避難して  
 いる。だからこそ、一刻も早くもといた場  
 所で生活をするといい選択をすること  
 ができると願っている。それは、県  
 外へ避難していった人も同じで前よりもす  
 と居る方がいい、楽しい、活気のある街に  
 したい。そして、避難した人だけで台  
 かなる人がこんなところに住みたいと思  
 う。よな街にすれば福島は福地はずと早く進  
 むと思う。私は、今よりもっと笑顔のあふ  
 んだ素敵なところにしてほしいと思う。

(20文字 × 20行)

218 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 鹿野 碧生

2011年3月11日地震発生時、私は下校  
 中でした。その時は小学生で何かおきていた  
 のか分からなくなり、とてもこわい思いをし  
 ました。家族は全員無事だ、たまたま、その  
 後の原子力発電発電所の事故により毎日不安  
 しかありませんでした。事故から二週間後、  
 少しでも遠くへ避難しようとして白河の西郷村に  
 一時避難しました。しかしホテルなどの宿泊  
 施設に泊まるとばく大なお金がかかってしま  
 うことから、役場に設けられた避難場に避難  
 しました。避難所では最初の方は食べ物もろく  
 になく、周りには知らない人たちがいて、さ  
 らに不安になりました。しかしその後はさま  
 ざまな所から食品や生活用品が届き、周りの  
 人たちとも仲よくなりました。少しは安心できまし  
 た。になりました。転機は四月にはいれきに帰  
 りました。内には帰れない人がいてとても  
 心が痛かったです。今は住む場所があるが  
 未だ世の人が、本当の家には帰れていません。  
 復元してほしいです。

(20文字 × 20行)



## 220 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 矢口 翔平

僕は震災のときは小学4年生でした。当時  
 は地震など考えたこともなかった。た  
 だ困惑していました。どのような状況かまよ  
 く分からず、両親の言うことを聞いて気を  
 付けて行動することしかできませんでした。学  
 校も休みになり、原発も爆発し、知り合いの  
 家に避難しました。原発が爆発したからとい  
 う、何が起るの分からなかった。僕は皆大  
 変だ、大変だと言っていたので、軽く大変な  
 人だと理解して終わってしまいました。ニュ  
 ースをよく見ても分からなかったが、学  
 校が再開し放射線について学び本当の放射線  
 の恐怖を知りました。ニュースにも目を向け  
 当時の現状を理解し生きていました。  
 震災から4年がたとうとしていきなり、僕  
 はあまり気にせず生活してました。でもニ  
 ュースでは、たまに原発について行っていて  
 考えます。原発に依存することなく減らすこ  
 とができれば、あのときと同じ思いをする人  
 が減るのではなにか、と。

(20文字 × 20行)

## 221 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 石と怜央

ぼくは、あの大きな地震がおきた時は、まだ小学4年生でした。いつも通り家へ帰ろうと、教室を友達とでたとき地震がおきました。最初は、小さなゆれ下したけどだんだん強くなっていき、ぼくたちはすぐに教室へもとり机の下にかくれました。地震はとてまながく、あまりおさまりませんでした。しかし、しばらくすると地震が少しずつおさまってきたので、校庭へひなぐしました。外へ出ると1年ほから6年生まで全員いました。だれにも笑顔はなく、みんな初めての経験におかえりしているような感じがしました。

そして、お母さんが向ヶ丘にきてます。おばあちゃんの家に行くとテレビでつなみの情報などしつやってまよってしまった。その時ぼくは、あらためて信じられないことがあったのだと思いました。

そして、今もひなぐして、家に帰れないう人がいます。1秒でもはやい復興をねがい自分もできることは、しっかりとがんばりたいです。

(20文字 × 20行)

## 222 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 秋田 峻秀

東	日	本	大	震	災	は	ほ	く	が	小	学	校	4	年	生	の	3	月	
11	日	に	起	こ	り	ま	し	た	。	ほ	く	は	そ	の	時	下	校	の	途
中	で	友	達	と	2	人	で	帰	っ	て	い	ま	し	た	。	最	初	は	小
さ	な	や	れ	て	し	た	が	徐	々	に	強	ま	っ	て	い	き	と	て	も
恐	怖	を	感	じ	ま	し	た	。	家	に	帰	る	と	電	気	も	カ	ス	も
水	道	も	止	ま	っ	て	い	て	真	っ	暗	な	夜	を	過	こ	し	ま	し
た	。																		
現	在	は	特	に	震	災	に	よ	る	被	害	は	受	け	て	い	ま	せ	
人	が	と	て	も	悲	し	い	と	思	う	こ	と	は	あ	ま	り	東	日	本
大	震	災	の	ニ	ュ	ー	ス	が	や	っ	て	い	な	く	な	っ	て	し	ま
た	こ	し	て	す	。	い	わ	き	市	は	う	で	良	く	て	も	、	津	波
の	影	響	を	受	け	た	沿	岸	部	の	人	に	ち	や	原	発	事	故	の
被	害	を	受	け	た	相	双	地	区	の	人	た	ち	は	ほ	と	て	も	悲
し	い	思	い	を	し	て	い	る	こ	と	で	し	よ	う	。				
ほ	く	は	こ	の	福	島	県	を	震	災	前	の	楽	し	く	、	に	ぎ	
やか	で	、	み	ん	な	が	や	さ	し	い	県	に	戻	る	こ	と	を	楽	
し	み	に	し	て	い	ま	す	。	今	ま	ど	は	無	理	か	も	し	れ	ま
せ	ん	か	つ	ん	が	て	力	を	合	わ	せ	、	ま	た	い	つ	か	こ	の
福	島	県	が	復	興	で	き	る	よ	う	に	み	ん	な	が	で	か	ん	ほ
ら	い	と	思	っ	て	い	ま	す	。										

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 佐々木 祐人

二〇一一年の三月十一日の東日本大震災を  
 私は福島第一原発のある大熊町で経験しま  
 した。感じたこともない揺れや聞いたことも  
 ない放射線というものを知り、自然災害への恐  
 しさとともに、今まで普通だと思っていた生  
 活が奪われ、現在避難先で生活をしていま  
 す。震災から四年目を迎える今年も被爆によ  
 る甲状腺線などへの影響を調べるための検査が  
 定期的に行われていきます。  
 その一方で、原発の廃りに向けて、今も作  
 業が行われていきますが、事故による国許被害  
 もまだまだあり、そのほかにも津波などのす  
 べてを含めて震災前の状態に戻ってしませ  
 人。そして、それらを行政や自治体等に全て任  
 せろの心持なく、自分達にひき合いをして、  
 一日でも早く復興してほしいと思っております。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 千葉優奈

私の心

震災と来に験がれた、原子力発電所の爆発。

多くの自然と、そして多くの人の心をも傷つ

けた。また、私の小さな心が揺らいだ。

毎日のように、どの報道番組でも被災地の

様子が流れていった。他県から、外国からの復

興支援など心過るような話にもあった。

しかし私は、こんな情報を耳にし、心が痛し

い。福島の女と結婚はするな、どう意味だ

らうか。どうしてなの。心の中で問い続けた。

被爆したトの子供は障がいを持ってしまっ

と、この意味だと分かった。

大した事のないニュースだと思っただろうが

あの当時の津波の映像や原発事故の映像と同

じくらいに胸にやきついてくるニュースだ。

どうして、被災地の子供をから、被爆した女

だかからと、いつ差別しないでほしい。

2	0	1	1	年	3	月	11	日	、	マ	グ	ニ	キ	ユ	ー	ド	9	。	
0	の	大	地	震	が	発	生	し	、	沼	ノ	内	に	住	ん	が	い	た	祖
父	母	の	家	は	津	波	で	全	壊	、	私	の	住	ん	が	い	る	家	も
電	気	と	水	道	が	止	ま	っ	て	し	ま	い	ま	し	た	。	更	に	福
島	第	一	原	発	の	爆	発	な	ど	次	が	ら	次	へ	と	恐	い	ニ	ユ
ー	ス	ば	か	り	で	生	き	た	心	地	が	し	ま	せ	ん	で	し	た	。
し	か	し	、	4	年	経	っ	た	今	で	は	徐	々	に	忘	れ	ら	れ	
い	き	て	い	ま	す	。	震	災	を	通	し	て	あ	た	り	前	の	日	常
や	命	、	家	、	故	里	の	大	切	さ	、	有	り	難	み	が	わ	か	り
ま	し	た	。	こ	の	こ	と	を	震	災	を	経	験	し	て	い	な	い	次
の	世	代	に	も	私	た	ち	が	伝	え	て	い	か	な	け	れ	ば	な	さ
な	い	と	思	い	ま	す	。	そ	の	た	め	に	ま	ず	は	自	分	か	ら
今	、	こ	こ	で	生	き	て	い	る	こ	と	、	存	在	し	て	い	る	こ
と	を	日	々	噛	み	締	め	、	感	謝	し	な	が	ら	生	活	で	き	る
よ	う	な	人	間	に	な	り	た	い	です	。	そ	し	て	次	の	世	代	
へ	と	私	の	思	い	も	こ	め	て	伝	え	て	い	け	れ	ば	と	思	い
ま	す	。																	

私は、東日本大震災という大きな災害を体験しました。私が小学生の時に体験し今でも忘れる事ができません。ユニボールが浮き上がり、校庭にはたくさん地の割れ。初めての事で自然の恐ろしさを知りました。家に帰る時ほど程怖い事が起こっているのか目に染みる感情でした。電話がつながらない、テレビの情報も津波や原発。おたずねのない光景に涙を流しました。家族の人に会えた時は一番安心しました。しかし、水も出ない、電気も停電するなど怖い想いをしました。原発の問題で茨城に最初に避難しました。食品の制限がソリソリの制限など、大変でした。その後は東京に行きました。もちろん多少の制限はあったけど、全く違いました。だからこそ他の地域の人にこの東日本大震災を忘れないで欲しいです。あたりまえに食べれていた物も何かの形であたりまえにできなくなってしまう事があることを全体に忘れないで下さい。私も忘れずに伝えていきたいです。

227

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 水戸部侑菜

私は、今でもあの時のことは忘れません。  
 たくさんの方が命を失った、あの大地震を。  
 私はあの時小学四年生で、帰りの学活が終  
 り。その後で、友達と楽しく会話をしていまし  
 ました。その時、いきなり大きな揺れがきて、忙  
 しい机の下にかくれました。私は、ず、と止  
 まらない揺れに、恐怖心でいっぱいでした。  
 そして家に帰れば、いろいろなものが倒れてい  
 たり、壊れていたりしました。水も出ず、初  
 めて経験した大地震は、こんなにも大変な状  
 況になるのだと知りました。そしてその後、  
 何回も余震が続き、その度に津波がきて毎日  
 思い思いをしていました。原発も暴発して、  
 外に出られず、遊び盛りの友達にと、とても  
 辛かったです。  
 そして、あの震災からもうすぐ4年たちま  
 ず。原発事故により、まだ帰れない人もいま  
 す。少しずつ復興に向けて努力をしています。  
 震災で亡くなった方や避難生活を送  
 る方の為に、早く復興することを望みます。

(20文字 × 20行)

2011年3月11日に突然起きた出来事。
 今まで経験した事がないが、た大地震だ、たか
 ら今でもよく覚えている。学校は休みになり
 電気、水道等少しの間止ま、てしま、た、生
 活も不便な物だ、た。でも、テレビを見て、
 自分達よりも苦しく、嫌な思いをしている人
 がたくさんいる事を知、た。津波による被害
 避難している人、大切な人を失、た人、そ
 がたくさんいた。そして、そを何度も見た。
 また、そんな人と出会、た。震災の影響を受
 けて、引、越して来て、私の学校の転校して
 来た人達だ、た。2015年の今でも、この
 ような人達はたくさんいる。そして、今でも
 問題とな、ている原発。福島県民には一番関
 わりのある問題で影響は大きい。
 原発問題、津波の問題等今でも、全部が解
 決したわけではない。全てが解決して、たく
 さんの人達が楽しく平和に生活できるように
 な、てほしいと思、ている。

東日本大震災を思い浮かべればいろいろな  
 気持ちがあふれ上がってきます。三月十一日、  
 私は学校の中にいました。最初の揺れは全然  
 小さかったけれどだんだん大きくなり一気に  
 私の心の中は恐怖が広がりました。私の家  
 族は大丈夫だろうか、これからどうなるのだ  
 ろうかなどと不安な気持ちしかありませんで  
 した。それでも世界中のみな様の力で復興へ  
 の道へと歩いていくことができました。私の  
 周りは震災前のように楽しく明るい生活にも  
 どりしましたが、ほかの町ではまだ完全に復興  
 できていないところが数多くあります。私は  
 その大震災の復興もそうですが、心のほうも  
 前のように明るくなりたいと思いました。  
 この東日本大震災は、つらかった思い出が  
 り忘れたいという気持ちがあるとおもいますが、  
 この東日本大震災がおこった出来事は絶  
 対におそれてはいけないなと思いました。い  
 つどこでなにがあってもこのことを思い出し  
 て、冷静な判断ができるようになりたいです。

私は、東日本大震災で家族も自分も大きな  
 被害はありませんでしたが、テレビで震災に  
 対して与えられた苦しんでいる人達を見ると、と  
 てき心が痛みます。いつまでも市営住宅で暮  
 らしていつ、家に帰れない人や、家族や他の  
 良いところの人達とはなればなれになってし  
 まった人達を、テレビで少しづつ見ると、た  
 だ、どうしてこの人達はこんな思いをしなく  
 ちゃいけないんだろうといつも思います。震  
 災があつたばかりで、どこもこんなにしてい  
 たことはいはれませんが、それだけでもまだ  
 問題はたくさんあります。でも、私にはテレビ  
 の前で心を痛めたい、復興支援などの募金  
 にちょっと協力する二とができませんが、み  
 んに色々を伝えたら、小さな積み重ねが福  
 富の今後の未来につながる、ていくと思ひます。  
 だから、今はみんなが団結して、少しづつ問  
 題に向きあう二とが大切だと思ひます。二  
 からの福富の未来が良い方に進ぶと良いなと  
 思ひます。

震災から5年の月日がたとうとしていきます。  
 私の住んでいる地域は大きな被害は少なかったけれど、やはりあの頃と変わった町なみを見ていると複雑な思いになり、てくるときが来ます。少しずつだけと確かに復興している。震災当初の荒れた町なみからは、元にもどって来ていると思います。それでもその時転校した友達は今もみんな戻って来ているのです。そんな風に震災の被害によって今まで住んでいた場所から離れることをまぎなくさせた人々が戻って来てここを復興したといえると思います。

私の住んでいる地域よりもひどく被害を受け、多くの命が亡くなっていったり、今でも家に帰れない人々がいます。いつでもその人々の思いながら一日一日を生き、復興へと貢献していきたく思います。

232

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 三本松 蒼風

平成21年の3月11日に東日本大震災が起きました。ときばくは、小学4年生でした。金曜日だったので明日を休みだとわくわくしていました。昇降口を出たときに、突然の大きな震れで、最初何かおきたのかよくわからなくなりました。その日の夜は、とても不安でした。5分おきに予震が続きラッオのニュースでは、津波の情報や原発の情報などをアナウンサーが早口で話をしていました。また、その夜の8時半ごろには停電がおき真暗になりても地震はおさまらなくて不安でした。昨日は、津波は午後には解除されましたが今度は、原発が危なくなっているというニュースが目立つようになりしました。その時大変になっていることを知り不安になりました。その地震の後4月11日あたりに学校が再開され少しは安心しました。地震は予告が難しいということを知ったのでこれからは防災意識をもって生活したいです。

その日はいつもと変わらずに下校をしていた。  
 その時、突然と悲劇の幕が開かれた。大地が  
 泣くように大きな音をたてて、大地がゆれは  
 じめた。木が音をたて、民家のまわりをおお  
 っている塙が落ち、カウ大連は奇妙な鳴き声  
 で空を舞っていた。今までにないとても大き  
 な地震であった。この地震がもたらしたのは  
 ただの揺れではなく、津波や停電、水道管の  
 破裂、原発事故など様々な被害を引き起こし  
 た。今までに体験しなかつたことが一気に起こ  
 り、不自由な生活に苦しむ。今までに比べだけ  
 幸せだったかということを実感した。今年で  
 あの東日本大震災から4年がたつ、今でも復興  
 はまだ続行しています。僕は今、不自由なく生  
 活ができていますが、津波などの被害を受け  
 た人々は今も不自由な生活をされているので  
 被害にあった人々が何も不自由なく暮らせる  
 ようになるまで復興してほしいです。一秒で  
 も早く復興して笑顔がまた見られるようにホウ  
 ティーなどに積極的に参加したいと思ひます。

234 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 柳 志穂

2011年の3月11日は多岐も覚えこ  
 ます。辛い。家は海に近くはなが。たの  
 が。今までに感じたことのないゆれで、こ  
 怖ら。たです。ゆれが収まっても、余震にあ  
 かん夜も寝れませんでした。今はもう恐れる  
 こと。これからのためにも忘れないう  
 にするほど立ち直りました。  
 しりし。また、あの時のことを思い出し  
 怖く感じる人も少なくなっていくでしょう。僕はそ  
 ういった人を助けたいです。同じよ  
 うな状況は味わった人にしか助けられない  
 はず。  
 単純にうれしさを片付けて終わり。ではあり  
 ません。心は外見を良くしても、心の傷を  
 なくさなければあまり意味がありません。心  
 の傷として自分の中に閉じこめておかないよ  
 う。心の復興を、自分達からすすめてい  
 たいです。

私は、震災なんて、関係ないところ、11の  
 時まで思っ ていました。その頃はオーストラ  
 リアのあで大きい地震が起きてニュースにな  
 っ ていたのを記憶しています。朝食を食べな  
 がら大変だなと他人事のように思っ ていまし  
 た。3、11から、約4年たとうとしていま  
 す。私はいわきに住んでいるので、いろいろ  
 と生活の中に、震災、原発の影響が残っ てい  
 ます。年が過ぎるほど、震災の記憶はうすれ  
 ていきますが、新聞で原発のニュースを見た  
 り、学校などに設置された放射能測定機を目  
 にする度、3、11の日が思い出されます。  
 きつと原発の問題は、これから何十年も、  
 続く事だと思っています。私は、今、自分ができ  
 事をしていきたいです。そして原発の問題を  
 忘れず、これから未来になっても原発の事を  
 後世に伝えていきたいです。

236 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 根本 亮

ぼくは、東日本大震災があった日、4年生  
 でした。2時46分は学校から帰る時間。雪道  
 がたおれたりしてびっくりしました。学校の  
 校庭で4時までまわっていきとまほすごくこわ  
 かったです。そして家に帰ってみると荷物や  
 家具がぜんぶたおれていて、お母さんは仕事  
 に行っていて、帰るのにじゆうぐらいで帰るの  
 がおそくなってしまい、となりの家の中に入  
 れてもらって、おとまっていました。お母  
 さんも帰ってまたとまほすいていました。

ぼくは、東日本大震災があった日から、3  
 年以上たっているのに、まだ復興してない  
 ところが多いと聞くと、あの日のことを思い  
 出してしまったりします。まだ苦しんでいる  
 人はいっぱいいると思うので、早く復興して  
 ほしい。でも道路や建物はけこう復興して  
 まっているので、このままとんとん復興してい  
 けばいいと思います。これから地震はある  
 と思うので、あの日のことを忘れずに生活し  
 ていきたいです。

それがおこったのは私が小学四年生のころ  
 でした。学校から家に帰る途中で感じたこと  
 のない大きなゆれにみまわれたのです。学校  
 の校庭は割れ、フェールの水がはげしくぶつか  
 りあひ、他学年の一、二年生は泣きはじめ、  
 頭の中がパニック状態でした。家に帰ると、  
 祖父がいきなり実家のならほに行っただけでこ  
 ろがなくなったのです。八時、九時と時間がたっ  
 ても帰って来ず時間とともに不安の波が押し寄  
 せました。その時は「おじいちゃん死んでた  
 ら…」と考えたくもない悪いことを考えて  
 しまっていました。でも、0時をまわし、日  
 付が変わり、たころ祖父は帰ってきたのです。  
 私は、とても安心しました。  
 あの時の祖父が帰って来ないときの不安や  
 恐怖は二度と忘れることができません。か  
 ら、海の近くの人には、もっと私の何十倍い  
 や、何百倍も苦しむ辛い思いを戦ってきたの  
 でしょう。私は、復興を願うのは一番、それ  
 とは逆にこの体験を伝えていきたいです。

238

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 古市 瑞姫

東日本大震災が起きたのは、3月11日、私  
 が小学四年生のときのことでした。私と友達  
 が下校しているとき地震が起き、あぐおさま  
 るだろうと思った地震が大きく長かったのど  
 とでも怖かったです。  
 家の中は、家具などが倒れてたり、食器が  
 割れてしまったりしてぐちゃぐちゃでした。  
 その後も地震が何回もきてビッワリしました。  
 ニュースも地震のことだけでこれから私たち  
 はどうなるのかなと思、ていました。けれど  
 福島が少しずつ復興し、町がだんだん元に戻  
 ってきて普通に暮らせるようになって、また  
 いわき市で暮らせるんだと思、たがすごくうれ  
 しくなりました。  
 私は震災を体験してみ、すごく怖いもの  
 だと実感しました。地震がくるまでは「あ、  
 地震だ」と軽い気持ちでした。地震がきてか  
 らは災害に対する自分の気持ちが変わりました。  
 この気持ちもいつまでも忘れずにこれか  
 らを生きていきたいと思、います。

(20文字 × 20行)

## 239 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 本間玲樹

私は小学4年生の時に東日本大震災を体験  
 しました。その時は帰りの会が終わって校庭  
 に集団でいました。友達と私で校門を出よう  
 とした時に少し木がゆれました。私達はまた  
 「震災」という経験をした事がなかったのど  
 この先大地震に悩むとは思いませんでした。  
 その2日後、原発が爆発して原発付近に  
 住んでいる人は避難。仲がよかった友達も知  
 り合いとばらばらに帰って自分の家ですら帰  
 えられなくなりました。私達はそれを  
 テレビで見ただけでしたが同じ福島県民と  
 してもすごく悲しくなりました。  
 電気は私達の生活に必要不可欠で原発も不  
 必要とは言いきれないのかもしれませんが、  
 これも人間がつくったものです。同じ福島県  
 に住んでいたトマが1人でも多く約四年前に  
 住んでいたふるさとに安心して帰りあの3月  
 11日午後2時42分で止まってしまった時計の  
 針が1分1秒でも早く再び動いてくれること  
 を同じ福島県民として願います。

私が小学四年生の時、東日本大震災が起きました。帰る途中で、大きな揺れを感じ、とても恐怖を体験してから四年が経とうとしています。その当時水道、電気、ガス等が使用出来なくなる事で普段の生活がどんなに恵まれた環境なのかと感じました。ここ最近、当時の辛い思い出を忘れてしまいいかに行動がたくさんあります。少しづつ、避難された人が元の家に戻ったり、新たな場所に移住したりして安定した生活に戻りつつありますが何時同じ様な災害が起きるか判らない事から常に準備をしておく必要があります。避難道具を決めた場所に備えてあります。最近もたくさんの自然災害が日本のあちこちで起きております。特に、洪水、噴火でせくな。た人々がいまます。前を向いて復興を進める事は大切な事ですが、過去の体験から日頃の心構えを大切にしながら、どんな災害が起きても冷静な行動が出来る様に家族と話し合いをしております。皆が元の生活に戻れる様に願っています。

## 241 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 水野 桃子

2011年3月11日。14時46分。た  
 れられたい出来事が起きた。当時、私は小学  
 校4年生で、合唱部に所属していた。その日  
 は、合唱部のお別れ会の最中だった。最初は  
 小さなゆれから始まった。そしてだんだん大  
 きくな、た頃、下の階から何人かの先生の声  
 が聞こえてきた。音楽室にいた生徒全員は急  
 いで階段を下りた。泣いてる子や転んだ子も  
 いた。私は、何度も「死んでしまうのではない  
 か」と思えた。生徒は全員、外に避難する  
 ことができた。

東日本大震災を経験し、学んだことや、考  
 えるようになったことかある。日本では、今  
 まださまざまな自然災害があつた。ただ、テ  
 レビで見ても終わるのではなく、被害にあつた  
 地域の人たちのために、できることがある。  
 募金など、小さいと思うが、それが大きな力  
 になるのではないかと。「助けよう」という気  
 持ちがあれば、これから自然災害が起きても  
 乗り越えられるのではないかと。

242

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 菅野 玲

あの3月11日、私は小学4年生でした。2  
 時46分、私はちょうど集団下校をしている  
 最中でした。あの長いゆれと同時に体の震え  
 も止まらず、不安な気持ちでいっぱいでした。  
 家に帰ると、家族もバニック状態で一時は近  
 くの公園に避難していましたが、あまりの寒  
 さに外に長時間いるとはできず家に戻りま  
 した。ですが、ガスも水も停まり唯一電気だ  
 けかっついていました。初めての経験を何もし  
 たらいいのかわからず、家族とも毎日のよう  
 に話し合いました。私自身も、今の現状を知  
 らなければいけないと思いテレビや新聞を見  
 たりしましたが、どの記事にも大津波の被害  
 が写し出されており、私達が避難している中  
 沿岸部の人々はあの巨大大津波から必死に逃  
 げていたんだなあと思うと、とても情けなく  
 感じました。また、福島県は原発の影響もあ  
 り避難する方も多くいました。本当に悩まさ  
 れる日々が続きましたが、徐々に復興に進み  
 つつあることに、とてもうれしく思います。

(20文字 × 20行)

243

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 鈴木 春香

3年前の3月11日におこった東日本大震災。日本中のみんながびっくりしたと思います。誰もが予想していながら、たぬき事や体験でした。

私は、あの日学校から車で帰る途中におこりました。はじめての出来事を体験してとてもこわかったです。震災でなくなった人たちもたくさんいました。そして、4月11日にまた大地震があつて私は、どれだけのこつが続くのかととてもこわくなりました。

現在では、ほとんどの暮らしに戻していただくために努力しています。一日でもはやく、復興できるといいなと思います。自然災害は、いつ、どんなときにおこるかわからないのでこわいんだと思います。この東日本大震災を経験した私たちは、これがいともすつと忘れてはいけないことではないかと思います。当時、とくなく、たんのことを考えるととてもかわいそうです。もう二度とこんなことがあつたないことを願いたいと思います。

(20文字 × 20行)

## 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 森 ありさ

平成 23 年 3 月 11 日 の 14 時 46 分。この時私は友達と一緒に下校している途中だ。いつも通り歩いてゐると近くにあった車庫のツタツターがガタガタと鳴りだし、その直後はげしい中れにおそわれた。何が何だか分からなくなっている時近くのブローワ壩がくずれ落ちるのを目にして前方に出来ていた人だかりに向け夢中で走った。この恐怖と中れがおさまり無事家に着けたときの安堵感は今でもほきり覚えている。

そして家族と無事再会できたときは本当にうれしかったし、あたりまえの毎日が大切だと知った。また、この震災でそのあたり前の日常を奪われ苦しんでいる人がたくさんいることも知った。私に人を生き返らせるような大きな力は無いけれど、募金など出来ることはある。だからみんなを協力して、その人の傷が少しでも癒えるように努力したい。一日でも早く復興して全国民にまた、幸せな日常が戻ることを心から願っている。

わたしは、東日本大震災で初めて地震がおよ  
ぼす影響やについてわかりました。今までに  
ない体験だ、たのど家のことなどがとても心  
配でした。お父さんがおかえにきてくれた時  
候、とても安心したことを覚えています。さ  
らには、いとこが家を流され一緒に住むこと  
になり、やっていけるか不安になりました。  
けれどみんながいて、落ちついてい  
られた気がします。

私は、この体験を通して地震の怖さを知りま  
した。学んだこともたくさんありました。  
なのでこれからは、水などを大切に使う、たり  
災害にそなえてなどできることはやっていき  
たいと思います。えうすることが災害があっ  
ても少しは楽にすごせると考えました。また  
トビの協力などをしていきたいと思いました  
協力がなかったらここまでのりこえなかった  
と思います。そして人への感謝と忘れないよう  
にしたいです。

246

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 水野航太郎

僕は三月十一日の震災の時、校庭にいました。  
 下校をしようと校庭に出た直後に地震が  
 始まりました。はじめは何がおこったか分か  
 りませんでした。すると、プールの水が津波  
 のようにとびでてきました。くつがぬれ、こ  
 れは何だか大変な気がするなと思いました。  
 校庭に整列し、先生の説明で地震が起こった  
 のだと理解し、ここまでの地震生まれてから  
 一度も経験したことがない、怖いと思いました。  
 その後お父さんがお迎えに来て、家まで  
 帰りました。その時、いつもの登下校の道は  
 いつもの登下校の道ではなかつたのです。道  
 路は大きく割れ、もりあがり、水があちこち  
 からとびでていました。改めて大変なことが  
 おこったのだと理解しました。その後、お父  
 さんは消防士だから、消防署に行かなければ  
 なうなく、男は家族で僕だけ。とても心ぼそ  
 くなりました。あの三月十一日の記憶が心か  
 ら消えることはありません。次あのような事  
 が起こった時しっかり対応できるといいです。

(20文字 × 20行)

## 247 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 鈴木 晃世

ドドドドン。いきなり大きな音が聞こえた。  
 2011年3月11日午後2時46分東北地方  
 に大きな地震がおそった。地面が上下左右に  
 揺れ地面には地割れがはいっていった。みんな  
 外に出てきた。みんなの心はすごくふるえて  
 いった。いきなりの大地震。これからどうなっ  
 てしまうのかという心配がよぎっていった。こ  
 の日から僕らの生活は変わった。水は止まり  
 がスも使えない、電気もつかないという過酷  
 な生活。ガスが使えないので食事もとれない。  
 という苦しい中、僕たちの支えとなってくれ  
 たのは自衛隊の方々だ。食事を持ってきて  
 くれたり、布団を持ってきてくれたのだ。  
 そのおかげで寒い冬を乗り越えることが出来  
 たのだ。た。  
 大地震が落ち着いてきたころ、復興作業が始ま  
 った。ここでこれまでの生活に戻れるように  
 頑張った。みんなと協力し、どんとんとともに  
 戻ってきたがまだまだ前には戻らない。今も  
 前に戻れるように協力して頑張っている。



ぼくはあの日、通っていた御厩小学校の3  
 階で、東日本大震災を体験しました。いきな  
 り「ギンギン」と大きな音をたてて、校舎が  
 大きく揺れました。その時は、みんなの悲鳴  
 や、立つ事をできないくらいの揺れにパニッ  
 クになり、しまい、机の下にかくれる事がで  
 きませんでした。何もできないまますわりこ  
 んでしまい、もし上から物が落ちてきた時を  
 考えると、恐怖に感じます。揺れがおさま  
 り教室を出ると、おぼんが全部飛びちっ  
 ていて、地震の大きさを物語っていました。この震  
 災を通じて、今まで行ってきた避難訓練を、  
 何かあってからでいいとか、どうせおきない  
 じゃなく、いつでも真剣に取り組みたいです。  
 津波で、被害にあった所が、たくさんある  
 ので、いちはやく、あのにぎあっていた、港  
 や学校が、よみがえってほしいです。海の近  
 くじゃなく、よかったとかじゃなく、みんな  
 で真剣に考えていかなければいけないので、  
 いちはやく、復興してほしいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 山中浩志郎

僕は東日本大震災で大切な友達を失いました。地震があつたとき、その友達はお互いのすくえばにいました。すぐに安全のために家へもどらされ、それからしばらくの間会えない日々が続きました。後日近所の公園に水をもらいに行つたときにやっと再会でき、そのときは本当にうれしかつたのですが、原発事故が判明したのはその直後でした。その友達と最後に会つたのは彼の家である団地の公園で遊んだときでした。

今まで毎日のようにいっしょに遊んでいた友達がとつぜん遠くへ行つてしまふ。よくあつた話です。自然災害のせいであるからおさらです。しかし、原発についてはもっと対策ができたのではないかと今でも思います。

予測できないのが災害なら予防できるのが事故だと思います。復興とがそれ以前に、災害などへの対策をし、事故予防につとめることが一番大切なことなのではないのでしょうか。